

---

# ドラゴンズクロニクル

天照

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴンズクロニクル

### 【Nコード】

N9348Z

### 【作者名】

天照

### 【あらすじ】

ドラゴン それは地上で最大にして最強の生物。火を吐き毒を吐き、間違いなくこの世界の頂点に君臨する存在。しかし、そのドラゴンに復讐を誓う者がいた。名はキリヤ。黒いドラゴンにすべてを奪われ、絶望した男。

## 始まりの日

「嘘……だろ……」

キリヤは、ついさっきまで村だった廃墟を前に、立ち尽くしていた。

つい先程まで確かにこの場所は、キリヤが生まれ育った『アルト村』だった。決して豊かな村ではなかったが、村人は優しい人ばかりで、とてもどかな村だった。小さくても人が少なくても、村人みんなで協力して必死に生計を立てている、そんなこの村がキリヤにとつての誇りだった。

しかし、今はかつての面影もなく見るも無残な瓦礫くずとなっていた。

「何があつたんだ……」

つい2時間ほど前、キリヤは母親に夕飯の買出しを頼まれ、徒歩で隣町まで出かけていた。

隣町は村から30分程度の場所であり、道中にモンスターも湧かないため、10歳だったキリヤにも夕飯の買出し程度は可能だった。

1時間程度で買出しは終り、キリヤは帰り道を歩いていた。キリヤは買い物籠の中の不思議な形の材料を見て、これで何作るのかなあ、などと考えていた。

具体的には、ぬめぬめした緑色のイソギンチャクのような生物や、頭が二つある魚、食べたら一発で死ぬそうな紫色のキノコ。さまざままなジャンルの食材があつたが全体的に気色悪く、直視していると吐き気がしそうだったのですぐさま物体Xたちから目を逸らした。

その時、ものすごい爆音とともにアルト村の方角から煙が上がった。そして、黒い何か<sup>、</sup>がアルト村から飛び立ち、遙か彼方へと飛んでいくのが見えた。

あれは……ドラゴン？ キリヤは興味本位でドラゴンに関する本を読んだことがあるが、本にはどこにも黒いドラゴンについては書かれはていなかった。

キリヤが全力で走って村に戻っている間にも、みんなの無事を祈る一方で、言い知れぬ胸騒ぎが無意識のうちに足を早くする。

村は地獄だった。

そこらじゅうに死体が転がっていた。それは知っている顔ぶればかりだった。

跡形もなく粉碎された家々。半ばから折られた時計塔。よく友達と遊んでいた広場も焦土<sup>しよつど</sup>と化していた。

まだ10歳だったキリヤにとって、このあまりにも突然で絶望的な光景は精神的に耐えられるものではなかった。

地面に膝<sup>ひざ</sup>から崩れ落ち、今にも逆流してきてしまいそうな胃物<sup>いぶつ</sup>を口をふさいで必死に押さえ込む。

なぜだ、どうしてだ。キリヤはひたすら考えた。しかし、答えは見つからない。いや、ひとつだけ思い当たることがある。数分前この村に向かつて走っているときに見た、黒い何か。あいつだ、きつとあいつがやったんだ。薄れゆく意識の中でそれだけは分かった。しかしなぜこの村にそれが現れたのか。それこそ本当に答えは出なかった。

吐き気がおさまると自然と足が動いていた。目で見て分かるものと記憶を頼りに一心に歩き続けた。

そして、ようやく目的の場所に着いた。毎日ここで食べ、寝て、笑った場所。泥だらけになって帰ってきたらいつも叱<sup>しか</sup>ってくれた。

そして、いつも優しくしてくれた人がいる場所、我が家に。

しかし、その我が家も原型を留めてはいなかった。

「父さん……。母さん……」

キリヤは朦朧とする意識の中で信じていた。両親は生きているとキリヤはただがむしゃらに、家の一部だった瓦礫くずを掘り続けた。

絶対に生きている。なんとしても見つけ出す。諦めてたまるか。

キリヤは心の中で何度も自分に言い聞かせた。

作業は1時間以上も続いた。瓦礫が予想以上に多く、常人、ましてや子供が出来る作業ではなかった。だが、キリヤは信じ続けた。掘って掘って掘りまくった。

キリヤはまだ子供だ。だからどれほど意識を強く保とうと体力には限界がある。手の皮は剥け、腕の筋肉は限界だった。

その時、瓦礫の奥に二つの人影が見えた。キリヤは最後の力を振り絞り最後の瓦礫を退けた。

二人の安否を確認するためにキリヤは二人の首に手を当て脈が無かった。

二人は抱き合い、二度と覚めることのない深い眠りについていた。キリヤは、安らかに眠る二人の顔を見ていると溢れる涙が止まらなかつた。

「俺、まだ親孝行なんてしてねえよ……」

キリヤは涙で濡れる顔を歪めながら呟いた。

もう誰もいない。いつも一緒に遊んでいたあいつも。あの魚屋のオツチャンも。そして、父さんも母さんも。死んだんだ。

そう認識した時、キリヤが今まで押さえ込んできた感情が爆発した。

「うわあああああああああ！」

キリヤは天に吼<sup>ほ</sup>えた。最後まで両親のそばにいられなかつた後悔。そんな自分に対する怒り。そして、この村をこんなにしたあいつへの怒り。そのすべての感情を乗せて叫んだ。そしてついに、キリヤの意識をこの世界に繋ぎとめていた、精神という名の紐<sup>ひも</sup>が切れた。視界がブラックアウトした。

\* \* \*

「うわあー！」  
俺はベットから飛び起きた。首は汗でぐっしより濡れていて、しばらくは呼吸が荒いままだった。

今の夢を見るのももう何回目だろうか。6年前のあの日から何度も夢に出てくるあの光景。今でも網膜に焼き付いている。

俺はふらつく足で窓際に行き、カーテンを開けた。

「ッ」

真っ暗だった部屋の中に明るい朝の日差しが差し込んできた。

そうだ。俺は6年前のあの事件を忘れない。忘れてはならない。

俺があの時、何を奪われ、何に絶望したのか。そして、すべての憎しみををあいつにぶつけるまでは。

朝日を全身に浴びながら、キリヤは人知れずに決意した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9348z/>

---

ドラゴンズクロニクル

2011年12月29日08時48分発行